

ノヴァーリスの術語「ロマン化」のメディア論的含意——諸学問思想の帰結としての「書物化」の要請

野村東生(東京大学)

本発表は、ドイツの詩人・思想家ノヴァーリス(1772-1801)の術語「ロマン化」のうちに、「書物化」すなわち「思考の物質化」というメディア論的含意を見出すことを目的とする。

18世紀末から19世紀初頭に展開された初期ドイツ・ロマン派文学運動の中心人物であるノヴァーリスは、運動の全体的傾向(「無限への憧憬」「精神の絶対的自由」等への志向)や、彼自身の作品における幻想的かつ深遠な表現によって、一種の神秘主義者とみなされる。

ノヴァーリスは文学作品のみならず、哲学・政治・宗教など多岐に渡るテキストを著した。これらのテキストの読解に際しては、上述の幻想詩人ないし神秘主義者としての性格・思想が強く読み込まれる傾向がある。しかし彼は、先行する世代のシラーに代表される「学問と人間の細分化・断片化」の問題意識や、ライプニッツを経た結合術思想など、多様な合理主義・啓蒙思想を受容し、より直接的にはフィヒテの知識学、すなわちあらゆる学問の基礎としての自我の哲学を熱心に研究した人物でもある。ノヴァーリス独自の百科全書学的実践「一般草稿」や、書物と学問を論じる『対話と独白』など、学問思想やその実践を前面に出した哲学的テキストの存在から、彼を18世紀の諸学問思想の集約者とみなすことさえできよう。ゆえにノヴァーリスの哲学的テキストを読解する際には、初期ロマン派思想の実践者たる幻想詩人としての性格のみならず、諸学問思想の集約者たる啓蒙思想家としての性格をも考慮せねばならない。

文学運動の名に冠された「ロマン」の語についても事態は同様である。本来「(ロマンス諸語で書かれた長編の)小説」を指すこの術語は、ロマン派の哲学的テキストにおいて共有される特徴的術語でもある。ノヴァーリスが有名な断章で「世界はロマン化されねばならない」と述べる時、従来の研究はそこに「世界の神秘化」という詩的含意を読み込んできた。無論この解釈は正当だが、本発表ではこの「ロマン(化)」という術語に、彼の学問思想に由来する「経験の書物化」というメディア論的含意がありうることを主張する。

まず、ノヴァーリスの書物観が表明された啓蒙的テキスト『対話と独白』を参照し、「諸学問の継承・結合の手段としての書物化=経験・思考の物質化」の発想を指摘する。次に彼が諸学問思想を受けて著した断章・研究ノートを参照し、特に彼が「ロマン」を「書物としての生」とみなす点に注目することで、「学問を含む経験・思考の総体=生を、書物という可読的物質へと変換する」という図式の妥当性を示す。さらに、諸学問思想に由来するノヴァーリスの世代観を示しつつ、細分化された学問を再び有機的に結合させてゆく端緒の世代としての彼の自負を指摘し、将来的にあらゆる学問の有機的結合を達成するための世代間継承の手段として「ロマン化=書物化」が志されていたことを論証する。